

山辺健太郎旧蔵「日本社会主義同盟名簿」

廣畑 研二

はじめに

- 1 兩名簿の成立事情と保管履歴
- 2 解散処分以降に成立した第1名簿第8冊
- 3 第2名簿の特徴と検証
- 4 第3名簿・第4名簿出現の可能性

おわりに

はじめに

久しく所在不明であった山辺健太郎旧蔵「日本社会主義同盟名簿」(全2冊)が、和光大学図書館から発見された。大和田茂氏による探究の成果である(『初期社会主義研究』第21号)。山辺存命中にこの名簿を閲覧した研究者は大久保利謙(『日本全史10近代Ⅲ』1964)で、その後、この名簿を論ずる研究はなされていないようだ。それから40年以上が経過した。

もう1つの堺利彦旧蔵名簿(全9冊)は、堺遺族から向坂逸郎の手を経て大原社研に寄贈された。こちらは原本が寄贈される前に、複写物が大原社研に提供され、研究に利用されてきた。藤井正の論考がその嚆矢となるものであろう(「日本社会主義同盟の歴史的意義」『日本の統一戦線／上巻』所収、1978)。この研究からも30年が経過した。

筆者は大和田茂氏に次いで、和光大学図書館長の許可を得て閲覧を果たし、兩名簿のデータ化作業を完了することができた。ようやく名簿研究の基礎的条件が整った。本稿は、長らく停滞を余儀なくされた名簿研究の再出発の機会とすべく、両者の考証作業を通じて得られた知見の一端を紹介するものである。

以下、名簿の成立事情に鑑み、便宜的に堺旧蔵名簿を第1名簿、山辺旧蔵名簿を第2名簿と表記する。

1 両名簿の成立事情と保管履歴

大和田茂氏の探究の成果は、もう1つ、第2名簿の筆跡鑑定により、主たる記帳者が近藤憲二であることが判明したことにある。この筆跡が判明したことが、両名簿の成立事情及び保管履歴の解明に直結した。

第1名簿全9冊のうち第1冊は、創立準備段階(山崎今朝弥事務所)で記帳が完了した原型全国版名簿である。第2冊から第7冊及び第9冊は府県別分冊及び新規加盟者、第8冊は結社禁止の解散処分以降にも継続記帳され、その成立が1922年4月以降であることが判明した。その根拠は後述する。その第8冊は内地全国だけではなく、海外にも及んでいる。

第2名簿全2冊は府県別のような分類はされていない。記帳場所は、山崎事務所から移転した麴町区元園町の新本部。両名簿の記載人数は次のとおり。第1名簿については藤井がカウントした1168人とは若干の違いがある。筆者は集団加盟(京都中央看護婦会)のうち氏名が分からない28人は除外した。

別表

堺旧蔵名簿	第1冊	第2冊	第3冊	第4冊	第5冊	第6冊	第7冊	第8冊	第9冊	計
延べ人数	430	149	58	42	181	77	38	295	197	1467
第1冊重複	8	48	26	16	54	41	20	2	79	294
第2冊重複		—								0
第3冊重複			—							0
第4冊重複				—				1		1
第5冊重複					5	1		4		10
第6冊重複						—				0
第7冊重複							—	1		1
第8冊重複								10		10
第9冊重複									2	2
三重複	1	2		1	2	2	1	11	3	23
実人数	421	99	32	25	120	33	17	266	113	1126
共通人数	421	40	10	13	77	20	10	4	61	656
山辺旧蔵名簿	第1冊	第2冊								計
延べ人数	553	482								1035
重複	25	39								64
実人数	528	443								971

両名簿に共通して記載されているのは656人、加減して1441人(1126人+971人-656人)の個人加盟実人数が判明した。

そして、両名簿が関東大震災でも焼失せず、かつまた特高警察にも押収されず、こんにちまで保存された理由は、同盟解散処分以降、大杉栄、近藤憲二らによる労働運動社が保管したことにあると考えられる。何故なら、麴町区元園町の同盟本部家屋は関東大震災で焼失したけれども、本郷駒込の労働運動社は類焼を免れたからである。

この同盟本部焼失という事実は、近藤憲二が証言するところであり（『一無政府主義者の回想』259頁、1965）、第2名簿の記帳者が近藤であることが判明したことによって、名簿の保管履歴を推定することが可能になった。近藤は次のようにも述べている。「解散された以上、公然と同盟を名乗ることはできぬが、今後も各団体の連繋を密にして進もうということに決定し、とくに同盟員の反対もなかった」（同書233頁）。同盟の創立に携わった人物達は、解散処分以降もそのネットワークを現実の運動に生かすという意味を持っていたのであり、その意思を労働運動社が引き継いだ結果、関東大震災での焼失を免れたのである。

その後、第1名簿は労働運動社から堺のもとに渡り、第2名簿は近藤憲二が引き続き保管した。したがって、現存する第2名簿は、ほんらい近藤憲二旧蔵名簿と称すべきものである。

2 解散処分以降に成立した第1名簿第8冊

第1名簿第8冊には、16の団体名と266人の個人名が記されている。これらの団体・個人は、その他の名簿分冊とほとんど重複せず、そのプロフィールを調査することによって、第8冊が1922年4月以降に成立したことが判明した。それらの名は、同年の大きな大衆運動と労働運動社との関係物を物語る。以下で示す名簿頁は便宜上つけたもので、原簿に頁表示はない。

まず団体名を2つ挙げてみると、3頁に「労働週報社」の名があり、6頁には「西部交通労働同盟」の名がある。『労働週報』は1922年2月に創刊され、4月に月島の労働会館に移転した。名簿に記された住所は、その移転後の所在地である。後者の労働組合の創立は1922年3月16日。『大阪社会労働運動史／第1巻』（1986）によると、この組合は関西「労働組合同盟会」の主要な構成団体である（743頁）。

つぎに個人名をみると、10頁に「山田清之助」の名がある。住所は「三重県松阪／三重県水平社本部」。三重県水平社の創立は1922年4月21日。山田は同水平社の機関紙発行人でもある。22頁には香具師にして愛媛県水平社の「徳永参二」、広島県水平社解放連盟の「高橋貞雄」、26頁には水平歌作詞者の「柴田啓蔵」の名がある。また、水平運動指導者の1人「栗須七郎」の名は、2カ所の住所で2度記載されている。いずれの人物も、この名簿に導かれた経路を推定することができる。「山田清之助」は自ら発行責任者である同機関紙に近藤憲二の論考を掲載しているし、「栗須七郎」と「徳永参二」は水平社創立以前から、堺利彦との親交がある。旧制松山高校に在籍していた「柴田啓蔵」を水平運動に導いたのは、水平社創立メンバー「近藤光」（旧姓名名成塚惣右衛門）であり、その「近藤光」は原型名簿たる第1名簿第1冊に名を連ねている（「成塚」の旧姓で記載）。

水平運動以外の活動家の個人名を見てみると、8頁に労働運動家「山内みな」の名があり、10頁には農民運動家「井谷正吉」の名がある。山内は、紡績女工として友愛会、総同盟、評議会、共産党と歩んだ経歴を持つ（『山内みな自伝』1975）。ところが、名簿に記載された住所は「大阪天王寺脇ヶ丘／後藤田正毅方」。前掲『大阪社会労働運動史』によると、この後藤田は組合同盟系労組「大阪造船労働組合」の代表者である（743頁）。さらに同書を見ると、山内は組合同盟系労組強化のため「労働週報社」から派遣されたと述べている（745頁）。山内の自伝では、彼女と組合同盟系労組との関係はよく分からないのだが、『大阪社会労働運動史』の研究は、期せずしてこの記載事

実の背景事情を説明することになった。同じく第8冊6頁には、組合同盟幹部の「大阪鉄工組合／坂本孝三郎」の名もある。そして、東西の労働組合同盟会は、自由連合を求め、同年9月の総連合大会が開催される大阪に集結することになる。

10頁の「井谷正吉」は、愛媛県北宇和郡日吉村を本拠とする異色な農民運動家で、名簿に記された住所は「三重県度会郡七保村」。何故三重県の住所で記載されたかということ、1919年から22年迄の間、彼が同地の村長「大瀬東作」のもとで自然科学と社会科学を学び、生物学者「丘浅次郎」と「大杉榮」の知遇を得、帰郷後の農民運動家としての基礎を築いたからである（『風雪の碑 明星ヶ丘』1980）。他に、「赤農倶楽部」（24頁、高知）、「赤色農民会」（30頁、千葉）といったアナ派農民団体の名もある。

また、23頁には「米田剛三」の名がある。米田はカリフォルニア生まれの日系2世、英名はカール・ヨネダ。1926年、日本軍の兵役を忌避して帰米、アメリカ共産党の活動家となり、マンザナー収容所から日系語学兵に志願した。山崎豊子著『二つの祖国』作中主人公のモデルの1人である。ヨネダの自叙伝（『がんばって』1984）は同盟について語らないが、ヨネダはこの当時、ギロチン社の「中濱鐵」（本名富岡誓）と文通するアナキストであった（拙稿「20世紀の証人 カール・ヨネダ」『トスキナア』第5号、2007）。中濱の名は第1名簿と第2名簿の双方にある。

さらに、この第8冊には「石田英一郎」、「松延七郎」、「池田隆」、「橋本省三」の名もある。前者の石田は旧制一高、後者の3人は旧制五高社研のメンバーで、石田、池田、橋本の3人は後に京都帝大に進み、治安維持法適用第1号の学連事件に連座する。石田は男爵家の御曹司だから、この第8冊には水平社同人、香具師、アナキスト、紡績女工、労働運動家、農民運動家、移民2世といった無産民衆だけでなく、「華族」まで名を連ねている。

このように、第1名簿第8冊は、同盟解散処分以降に組織された団体・個人の名簿であるとともに、1922年を起点とする水平運動、農民運動という大衆運動と密接な関係を持ち、挫折したとはいえ、労働運動の大合同を支援した大衆のネットワークの記録だと言うこともできる。

3 第2名簿の特徴と検証

第2名簿の特徴の1つは、氏名と住所以外に、詳細な注記がなされていることにある。全ての人物の職業が記されているわけではないが、農民、各種工具、坑夫、車夫、商人、会社員、吏員、学生、教員、新聞記者、僧侶、医師、弁護士、著述家、芸術家といった職業に加え、組織実務に関する注記もある。加盟構成員の階層と組織活動の経緯が具体的に分かる。

例えば、氏名の脇に「規約何部」、「講演隊申込」、「寄付金一円」等の注記がある。加盟オルグに奔走するメンバーの姿が目に見えようである。かと思えば、「郵便物宛所不明返り来ル」とか、「退盟」等の注記もある。この名簿が、通信・組織事務に実用されたことがよく分かる。当初、発起人に名を連ねた「高島素之」の氏名には取消線が付され、「10月18日同盟脱退」と注記された（先に示した1441人には、高島らの退盟者も含む）。また、近藤憲二の丁寧な筆跡で清書されたため、第1名簿では判読できない崩し字が、第2名簿のおかげで判読できるといった副次的効果もある。

もう1つの特徴は、集団加盟にある。建設者同盟、鉦夫総同盟会、エル・エル会、正進会、信友

会、北郊自主会、新人会、黒旒会、牧民会（盛岡）等の団体からまとまって加盟している。また、集団加盟の変型として、特定の人物が多数の人物を紹介している例が複数ある。「武者宗十郎」なる人物が紹介した57人は、第1名簿とはまったく重ならない。

さて、同盟名簿と既刊の人名事典とを比較してみたところ、名簿に記載された人物1441人のうち2割程度は立項されており、同盟加盟者の知名度を物語る。しかし、既刊の人名事典の人物紹介は、同盟にはほとんど関心を持っておらず、同盟発起人とその周辺人物についてのみ同盟との関係を記述するにとどまる。例えば、両名簿に記載された北京大学教授「李大釗」といった中国共産党の歴史的要人について、既刊の人名事典は同盟加盟の事実に触れていない。第1名簿が30年前から大原社研で公開されていることを思えば、この間の名簿研究の停滞の反映であろう。

しかしながら、手がかりの乏しい人物のプロフィールを探る作業から、新たな発見がある。職業の注記がない人物の中で、プロフィールの一端が分かった人物を3人挙げてみよう。

1人めは、「新井清太郎」（第2名簿19頁）。名簿に記された住所は、京都府綴喜郡青谷村。それ以外の情報はない。この新井は1916年から41年までの4半世紀にわたり、『山城』という地方新聞を発行した人物である。彼は、京都府警察部の特別要視察人指定を受けていたため、警察資料に新聞『山城』発行人として記載されている。そして、その警察資料の記述をもとに、『山城』25年分全号が発見された。遺族が保存していたのである。その『山城』は現在、解題作業が進められ、中西伊之助や山本宣治を生みだした京都府南部地域史の掘り起こしが進みつつある（『洛南タイムス』「南山城の光芒」連載）。

2人めは、「細見文治」（第2名簿35頁）。住所は兵庫県氷上郡。彼はその後、隣地の京都府福知山に居を移し、そこで『福知山魁新聞』を発行した。彼もまた特別要視察人として、別の京都府警察部の資料に記されている。『福知山魁新聞』はまだ発掘されていないようだ（ここで言及した警察資料は、筆者編『戦前期警察関係資料集』第1巻と第4巻に収録した）。

3人めは、「高市盛之助」（第2名簿24頁）。住所は松山市春日町。彼は、この当時『愛媛新報』編集長で、後に『大衆時代』という左翼地方紙を発行した。『資料 愛媛労働運動史』（全9巻）は、両紙が掲載した水平運動と農民運動に関する記事を多数収録している。同じ愛媛に注意を向けると、先に言及した農民運動家「井谷正吉」の「闘友／林田哲雄」（第2名簿9頁）の名もある。林田は水平社創立大会に参加した人物でもある（『郷土に生きた人びと 愛媛県』1983）。

このように、名簿には新聞人が数多く名を連ねている。この名簿が、『山城』や『福知山魁新聞』のような、これまで知られていない地方紙と新聞人の発掘につながる可能性もある。

ところで、第2名簿を分析する上で、検証しておかなければならない問題がある。山辺存命中に、第2名簿を実査した人物は山辺を含め少なくとも3人居る。ところが、その3人が、名簿について皆異なる証言をしているのである。山辺は名簿人数（延べ人数）が1033人だと言うし（『日本のマルクス主義』『思想』第385号、1956）、前掲の大久保利謙は1333人だと言っている。後者は数字の誤植と理解するほかない。もう1人、同盟当事者である高津正道は名簿を実査して107人の名を挙げたのだが（『旗を守りて』1986）、現存名簿に見あたらない人物が5人居る（仲宗根源和、仲宗根貞代、高橋貞樹、野田律太、秋月静枝）。このうち秋月以外の4人は第1名簿にも記されておらず、高津が当事者であるがゆえの勘違いの可能性が高い。別名での記載を考証する必要はあるものの、

懸念された落丁のおそれはない。現在名簿は落丁のない完本名簿である。

4 第3名簿・第4名簿出現の可能性

国内に現存する2つの名簿とは別に、コミンテルンの手に渡った名簿があるという証言がある。国内の社会主義者とは無縁でありながら、1921年に入露し、片山潜と田口運蔵の庇護を受けた小玉三郎という人物の資料である。1つは小玉が望郷の念やみがたく、24年末、フィンランド国境を越境してヘルシンキ警察で勾留された際に書いた本人直筆上申書。もう1つは、小玉がその後ロンドン、マルセイユ経由で日本に帰国した際、神戸水上警察が行った訊問聴取書。この2つの資料によると、社会主義同盟名簿の写しがモスクワのコミンテルン本部とチタにあり、それは日本民衆向けの社会主義宣伝文書を郵送するために使用されたというのである。

小玉はまた第1次共産党の党員名簿がコミンテルンに提出され、その人数は約千人だとも言っている。コミンテルン第4回大会に派遣された高瀬清と川内唯彦が、「党員250人、党員候補800人」という党勢規模を報告したとされている（"Protokoll des Vierten Kongresses der Kommunistischen Internationale" 1923）。

名簿まで提出されたという証言は他になさそうだが、コミンテルンが名簿という根拠資料もなく、党勢規模の報告を鵜呑みにするとも思えない。小玉は片山潜の庇護を受けていたため機密情報に接することもあった。小玉の証言は軽視することができない。党員名簿の提出を迫られたならば、片山潜が精査する可能性を考え、実在の人物名を使用しなければならない。この党勢規模報告が誇大であったとするのは史家の共通認識なので、「誇大」な党勢報告にふさわしい名簿を作るとすれば、同盟名簿を流用して作成した可能性があるのではないか。ソ連崩壊後、コミンテルン文書の公開が進められている。それらの中から、第3・第4の名簿が出現するかも知れない（小玉の資料は前掲『戦前期警察関係資料集』第2巻に収録した）。

おわりに

以上、2つの名簿を実査して得られた現時点での知見の一端を紹介し、これとは異質な政治的名簿の存在も推理してみた。同盟名簿研究においては、記載された人物とともに、記載されていない人物にも関心を向けなければならない事情がある。同盟がアナボル混成の試みでありながら、現存名簿にはアナ派の人名が目立つのに、ボル派の重要人物がもれているからである。例えば、第1次共産党の徳田球一、佐野学、饒平名智太郎、仲宗根源和、川内唯彦、川合義虎らの名がなく、水平運動史研究では加入していたと必ず叙述される阪本清一郎や西光万吉らの名もない。これとは逆に、従来は同盟との関係が取りざたされない水平社同人、労働運動家、農民運動家、新聞人等が名を連ねているというのが、両名簿が物語る史実なのである。

そして、もしもコミンテルンに渡ったという政治的名簿が現存するならば、そこには徳田、佐野、饒平名、仲宗根、川内、高橋貞樹、川合義虎らの名があると思われる。とはいえ、国内に現存する名簿ですら、その研究はようやく緒についたばかりである。知名人が多いとはいえ、1400人を超え

る人物研究は容易ではなく、第1名簿第8冊が、解散処分以降に成立したという事実は、同盟の歴史的評価の見直しを迫る。それは即ち、解散処分以降の非公然活動記録に他ならないからである。

なお、山辺旧蔵名簿は一般にはまだ公開されていない。閲覧希望者は、必ず和光大学図書館に事前照会をされたい。

(ひろはた・けんじ 日本近代史研究者)

**中小企業における
新型インフルエンザ対策
アクションマニュアル**
— 新型インフルエンザ感染から従業員と事業を守るために —
川上 剛 編著 / 吉川 徹・和田耕治 訳
A4・19頁 定価1050円
このマニュアルは使いやすく実用的で説明や記述を含め多様な予防対策に関する行動チェックポイントを紹介。

**医療施設等における
メンタルヘルス向上のための
職場環境改善チェックリスト**
吉川 徹編 / 医療機関におけるメンタルヘルス向上のための安心・安全で快適な職場環境改善チェックリスト作成ワーキンググループ 著
A4・16頁 定価1050円
メンタルヘルス改善を目指した職場環境改善のツールとして開発された医療現場向きのチェックリスト。

**「人間らしい労働」と
「生活の質」の調和**
— 働き方の
新しい制度設計を
考える —
第81回日本産業衛生学会企画運営委員会編 企画運営委員長 岸 玲子
A4・353頁 定価1575円
日本産業衛生学会 学会創立80周年を記念して発行された書籍。

雇用形態多様化と労働者の健康
矢野栄二 編著 / 三柴丈典・飯島美世子・中野麻美・井上まり子・
錦谷まりこ・栗原伸公・森 晃爾・梶木繁之・嶋桃代・阿部重一 著
A5・302頁 定価2100円
「非正規の雇用・就業状況が労働者の生命や健康にどのような影響を及ぼすのか」ということを共通の問題意識としてまとめられた書籍。

財団法人 労働科学研究所出版部
〒216-8501 神奈川県川崎市宮前区菅生2-8-14 TEL 044-977-2125 FAX 044-976-8190
E-mail : shuppan@isl.or.jp URL : http://www.isl.or.jp/ (価格は税込)